

目 次

第19回大会報告

研究発表・シンポジウム

総会報告

大会を終えて……………福元 真由美

第 20 回大会へのご案内……………勝山 吉章

研究発表・参加記……………向山 陽子・小笠原 正太郎・

瓦林 亜希子

会員研究情報……………勝山 吉章・稲井 智義

新入会員 / 寄贈図書

機関誌編集委員会・事務局からのお知らせ

第 19 回大会報告

第 19 回大会は、2024 年 12 月 16 日（土）に青山学院大学にて対面で開催されました。大会の詳細は以下の通りです。

研究発表

司会：大西 公恵（和光大学）
師岡 章（白梅学園大学）

1. 戦時体制下のラジオ番組
中村 美和子（お茶の水女子大学）
2. 東京女子高等師範学校附属幼稚園
規則改正(1911-1916)に関する一考察
向山 陽子（白梅学園大学大学院・院生）
3. 戦前期日本における在日朝鮮人の保育
大石 茜（津田塾大学非常勤講師）
4. 「実験学校」の思想
一沢柳政太郎と成城小学校の実践的研究—
太田 素子（元和光大学）

シンポジウム

テーマ：子どもの権利と保育・幼児教育
—歴史と現状—

提 案 者：喜多 明人（早稲田大学名誉教授）
浅井 幸子（東京大学）

稲井 智義（北海道教育大学）

指定討論者：近藤 幹生
（白梅学園大学名誉教授）

司 会：村知 稔三（明治学院大学）

【関連企画】12 月 17 日（オンライン開催）
海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながら
フォローする会（愉フォロ会）

内容：星 三和子 著『イタリア・ピストイアの乳幼
児教育』（明石書房、2023 年）の読書会

司会・報告：塩崎 美穂（東洋英和女学院大学）

総 会 報 告

報告事項

1. 新理事会体制（敬称略）

◇浅井事務局長より、第7期選挙開票結果に基づき、新理事および理事会体制が報告された。

理事：秋山 麻実 浅井 幸子 浅野 俊和
稲井 智義 小玉 亮子 塩崎 美穂 榊 瑞希子
早田 由美子 松島 のり子 湯川 嘉津美
会長：湯川 嘉津美 副会長：小玉 亮子
事務局長：浅井 幸子 会計：松島 のり子
会誌編集長：塩崎 美穂
同副編集長：湯川 嘉津美
会報：榊 瑞希子 J-STAGE：浅野 俊和
監査：布村志保 永井優美

2. 第18回大会年度（2022.10.1～2023.9.30）会務報告

◇浅井事務局長より、会員数・第18回大会の開催について報告された。

- (1) 会員数：2022年11月末現在、168名。
- (2) 第18回大会：2020年12月10日、東洋英和女学院大学にて開催された。大会参加者は研究発表40名、シンポジウム42名。

3. 編集委員会報告

◇浅井事務局長より、機関誌第18号の刊行について報告された。

- ・『幼児教育史研究』第18号、2023年11月10日付で発行。
- ・編集委員長は湯川理事（投稿論文担当）、編集副委員長は勝山理事（書評担当）。
- ・投稿論文は5本で、うち2本を論文、1本を研究ノートとして掲載。その他シンポジウム記録、書評2本、図書紹介2本を掲載。

4. 会報の発行について

◇浅井事務局長より、会報の発行について報告された。

- ・第35号を4月12日、第36号を6月30日に発行、その後Web公開版をアップ。

5. その他 特になし

審議事項

1. 第18回大会年度（2022.10.1～2023.9.30）決算

◇福元理事（会計担当）より、資料2「第18回大会年度幼児教育史学会収支報告」（省略）に基づき報告がなされ、承認された。

2. 第19回大会年度（2023.10.1～2024.9.30）事業計画

◇浅井事務局長より、第19回大会年度事業計画について説明された。

- (1) 『幼児教育史研究』第19号の編集

- ・機関誌第19号の編集委員長、副編集委員長を選出する。申し合わせでは正副編集委員長は1年交替で、正委員長は翌年副委員長として残り、業務の円滑な引継ぎを図ることになっている。第19号については、正委員長として塩崎理事を、副委員長として第18号編集委員長であった湯川理事を推薦する。

(2) J-STAGE 上での公開について

- ・機関誌第18号は3月頃に公開予定。

(3) 会報の発行

- ・従来通り2月頃（第37号：第19回大会報告）、6月頃（第38号：第20回大会案内）を予定している。会員研究情報などの充実に努める。

(4) 第20回大会の予定

- ・会場：福岡大学（福岡市） 実行委員長：勝山会員。
- ・日程：2024年12月7日（土）を予定している。

3. 第19回大会年度（2023.10.1～2024.9.30）予算案

◇福元理事より、資料3（省略）に基づき、第19回大会年度予算案が説明され承認された。

4. その他 特になし

第20回大会へのご案内

第20回大会実行委員長 勝山 吉章（福岡大学）

第20回大会は、2024年12月7日（土）に、福岡大学図書館多目的ホールで開催します。皆様のご参加をお待ちしています。福岡大学は、福岡市にある九州最大の私立大学で、人文、法、経、商（商二部）、理、工、薬、医、スポーツの各学部と各大学院をもち、約2万人の学生・大学院生が在籍しています。校風は、漫画家小林よしのり氏の母校でもあるように、保守本流を伝統としています。

さてこの度の大会は、20周年記念大会でもあることから、シンポジウムでは幼児教育史研究の在り方をあらためて問うような企画を考えています。また、何かそれ以外にも企画についてご提案がありましたら、ご教示下さい。自由研究発表も、積極的に応募して下さいますようお願いいたします。

福岡大学へは、福岡空港から博多駅乗り換えで、全て地下鉄で繋がっています。ただ、福岡は東京や大阪並みのコンサートや学会が開催されることが多く、常にホテル不足です。早めにホテル等を抑えておかれることをお勧めします。ホテルは、博多駅、地下鉄七隈線の櫛田神社前、天神南、渡辺通、薬院、薬院大通、桜坂の各駅周辺が便利です。福岡は、食も美味しいと評判です。韓国や台湾も近く、大会前後に旅程に組み込まれてはいかがでしょうか。皆様のお越しをお待ちしています。

大会を終えて

第 19 回大会実行委員長 福元 真由美 (青山学院大学)

幼児教育史学会第 19 回大会は、2023 年 12 月 16 日 (土) に青山学院大学青山キャンパスにて開催されました。新型コロナウイルス感染症の「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」上の位置づけが、5 類に移行してはじめて開催された大会で、総勢 60 名 (一般会員 38 名、学生会員 7 名、非会員 5 名、非会員学生 10 名) の方に参加いただきました。大会は 9 時 30 分から 12 時 30 分に研究発表、14 時から 16 時 30 分にシンポジウム、16 時 45 分から 17 時 30 分に総会というスケジュールで、おかげさまで滞りなく進行しました。

午前中の研究発表では、師岡章会員と大西公恵会員の司会のもと、4 つの発表がありました。発表者 (敬称略) と発表タイトルは、中村美和子「戦時体制下のラジオ番組『幼児の時間』の変遷」、向山陽子「東京女子高等師範学校附属幼稚園規則改正 (1911-1916) に関する一考察」、大石茜「戦前期日本における在日朝鮮人の保育」、太田素子「『実験学校』の思想—沢柳政太郎と成城小学校の実践的研究」です。今回は、戦前から戦時期の日本を舞台に、幼児と保育・教育をめぐる思想、制度、メディア、外国人政策の領域というテーマの広がりをもつ発表が行われ、熱心な質疑応答から会員の関心の高さがうかがわれました。

新型コロナ感染症の防止対策には、引き続き自主的な実施が必要とされる状況だったため、懇親会の開催は見送りました。その代わりに、昼食、休憩時の茶菓と飲み物に美味しいものを用意し、会員相互の交流を図る時間をより楽しいものにしていただくよう心がけました。上記の時間には、会場のあちこちで会員同士で談笑される様子がみられ、対面で交流するよさを心感しました。

午後のシンポジウムは「子どもの権利と保育・幼児教育—歴史と現状—」と題し、学会の外から喜多明人氏をシンポジストとしてお招きするとともに、浅井幸子会員、稲井智義会員にシンポジスト、近藤幹生会員に指定討論者としてご登壇いただきました。子どもの権利条約の日本批准 30 年を前に、乳幼児の意見表明権を保育現場でどう考えるかという問題提起 (喜多) にはじまり、歴史的な「子どもの権利」の子ども観に疑念の目を向けたローリス・マラグツィの思想と子どもの権利を探究するレヅジョ・エミリアの実践 (浅井)、子どもの権利が保障されない事態におけるアナーキズムの視点の可能性 (稲井) が提示されました。フロアからは子どもの権利と保育者の権利の関係、乳幼児の「幼さ」や保育の「不適切指導」をどう捉えるか等の質問が出され、時間が足りなくなるほどの充実した討議が行われました。

翌日 17 日 (日) の大会関連企画「愉フォロ会」は、塩崎美穂会員の企画により、星三和子『イタリア・ピストイアの乳幼児教育』(明石書房、2023 年) の読書会が、オンライン(Zoom)で行われました。星氏を交え、とても活発な議論が展開されました。

今大会の運営にあたっては、青山学院大学、同大学院の同窓生や青山学院にゆかりのある会員、非会員の方々から多大なるご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

研究発表・参加記

「東京女子高等師範学校附属幼稚園規則改正 (1911-1916) に関する一考察」を発表して 向山 陽子 (白梅学園大学大学院)

私は、幼稚園教育の実験家坂内ミツ (1887-1956) の幼稚園教育に関する思想形成を研究対象としております。

坂内が、東京女子高等師範学校卒業後に奉職した、同校附属幼稚園主事安井てつの時代 (1912-1917、1910-1912 主事事務取扱) の同校附属幼稚園に関する先行研究と出会えないことが不思議でした。この時代の史料が、お茶の水女子大学歴史資料館に現存する知らせを受けた時、喜びと重圧が入り混じった衝撃にその場で 20cm は飛び上がったと記憶します。史料には、幼児の健全な育ちと保育の向上を願う、附属幼稚園の課題と方策が記されており、この思いを繋いだ実験家たちの改善過程が見えてきました。バトンを渡された思いになり、第 19 回大会に発表させていただきました。

早口、スライド早送りの拙い発表となってしまいましたこと、お許しください。にもかかわらず、ご意見をいただき、大切な視点を頂きましたことに深謝いたします。

先生方のご発表には学ぶところも多く、とりわけ、私の研究対象も影響を受けたと思われる沢柳政太郎と成城小学校に関する太田先生のご研究には、今後も目が離せません。

午後のシンポジウム「子どもの権利と保育・幼児—歴史と現状—」では、身近な園での乳幼児の意見表明権の実際について考えさせられ、また、翌日の愉フォロ会では、星先生のイタリア・ピストイアのお話を伺いながら、私自身の、幼稚園教諭・園長を軸に、地域活動、保育者養成に関わってきた 50 余年を思い起こしておりました。子どもたちをめぐる法律、制度、世間の風潮が変わってきた中で、今は年賀状で繋がる A くん、B さんたちの、これまでとこれからを想っておりました。

子どもたち、家族、保育者の誰もが、今居るそれぞれの時空を、自分の、自分たちの時空として参加し、心地よいものへと変えていく力を育み合う場としての、幼児教育・保育施設での乳幼児の日々の営みを思う時間となりました。ありがとうございました。

た。

学会に参加して

小笠原 正太郎（早稲田大学大学院）

歴史を感じる校舎が立ち並び、大聖堂を彷彿とさせるようなガウチャー・メモリアル・ホールにはクリスマスの装飾が施されていた。その隣、2号館に隠れた奥まったところに会場となる11号館があった。

これまで他の学会は、よく知っている先輩たちに連れられていたり、同じ研究関心を持った友人・知人と参加したりすることが多かった。今回も、幼児教育史で同じ志をもつ方と一緒に赴く予定であったが、当日の朝に諸事情により参加できない旨が伝えられた。そんなことから、初めて知り合いのいない、完全アウェイな学会参加だったのである。

多少不安はあったが、諸先輩方から声をかけてもらったり、ご挨拶した先生から「論文が掲載されてよかったですね」と言葉を頂戴したりできた。分科会がいくつにも分かれるような大規模な学会でないこそ、人と人との距離が近く、温かい場になることを改めて感じたのであった。

午前中の個人発表は、その内容がバラエティに富んでいた。戦時下体制のラジオ番組の変遷を追うもの、東京女子高等師範学校附属幼稚園の規則改正の意味を考察したもの、戦前の在日朝鮮人の保育の実態に迫ったもの、沢柳政太郎の実践的教育の意味の解明を試みるものである。私の専門はアメリカの教育史であることから、理解が及ばないところもあったが、何度か質問することもでき、他の先生から私の質問への補足がいただけたことも良い経験になったと感じた。また、太田素子先生のような大御所の先生の発表を聴けたことも貴重であったし、まだ沢柳研究に「実践」をめぐるこのような研究上の論争があるのか、ということに驚きを感じたのであった。

午後のシンポジウムは、子どもの権利と保育に焦点をあてたもので、喜多明人先生、浅井幸子先生、稲井智義先生がそれぞれの研究関心から論じていた。喜多先生の「今の子どもはマイノリティになっている」という話や、幼児教育・保育にはアナーキズムの観点が必要であるとする稲井先生のご発表には、驚きとともに大きく学ばせていただいた。特に、後者の観点は、「参加」という観点からレジョ・エミリアを通じて子どもの権利について論じた浅井先生のご発表とも通じることがあると感じた。時間が足りなく、最後私からの質問も中途半端になってしまったが、先生方と交流できたことは価値あるものであった。

一人で参加した学会であったが、1日を通じて多くの人と話す機会をもつことができ、様々なことを学ぶことができた。今回の経験を糧に、次は学会で発表できれば、と考えている。今後ともご指導ご鞭撻のほどいただければ幸いです。

新入会員としてのごあいさつ

瓦林 亜希子（都留文科大学）

ご挨拶が遅くなり、申し訳ございませんでした。2022年12月より、幼児教育史学会に入会致しました、都留文科大学の瓦林と申します。私は、元々は文学部のフランス文学科にいたのですが、教職課程の授業で偶然出会ったフランスのフレネ教育と日本の生活綴方教育が、自分自身が受けてきた日本の管理的な教育方法とあまりにかけ離れており、子ども中心の教育が日本とフランスに戦前から存在していたことに感銘を受け、教育学を専門に学び直したいと考えるようになりました。その後中央大学の教育学科に学士入学し、同大の修士課程まで進み、フレネ教育技術の一つであり生活綴方と類似点の多い「自由テキスト」という実践の意義についての修論を提出しました。しかしながら、修士課程での学びを経て、フレネが生まれたフランスの現地に行ってみようという思いが強くなり、修士課程修了と同時にフランスに渡りました。

当初は一年間だけの滞在の予定でしたが、パリ第五大学の教育学修士課程に入学を許可されたため、フランスに残ることにしました。その後、パリ第五大学のマスターまで進み、さらにパリ東洋言語文化研究所（通称INALCO）の比較教育学の教授であるクリスチャン・ギャラン先生のもとでドクターに入学しました。そこで日本の生活綴方とフレネ教育の比較研究についての博士論文を提出し、2015年に教育学の博士号を取得しました。それまでの間、フランスのフレネ教育の現場を見学したい思いから、パリや全国各地で開かれるフレネ教師グループ主催の研究会に飛び込みで参加し、幼稚園や小学校でのフレネクラスを多数訪れることができました。その結果得られたフランスのフレネ教師・フレネ教育研究者の方々との出会いによって、日本に本帰国してからも彼らとの交流や共同研究を続けることができていることは、大変有り難いと思っています。

現在、仏ロレーヌ大学のフレネ教育研究者：アンリ＝ルイ・ゴ先生が率いる教育学部 LISEC 研究所の国際共同研究者として、日仏の幼稚園・小学校でのフレネ教育実践の現状と在り方について、共同研究を進めています。幼児教育についての知識はまだまだ浅いので、こちらの学会にてさらに学びを深めたいと考えています。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

会員研究情報

ナチの幼稚園に連帯した日本の幼稚園

勝山 吉章（福岡大学）

1933年に権力を掌握したナチは、自由主義的な教育施設や宗派的教育施設を排撃し、全ての教育施設をナチズムに統合していった。そのなかでシュタイナー（ヴァルドルフ）学校やモンテッソリ学校も

1930年代末には廃校の止むなきに至ったが、フレール幼稚園はナチが期待する以上にナチに積極的に迎合したことによって、ナチの庇護を受けた。例えばバード・ブランケンブルクのフレールハウスでは、1936年4月に幼稚園教員にアーリア人種の優秀性や民族共同体への犠牲を教えるナチズム研修会がドイツフレール連盟によって開催されている(図参照)。ナチがこのフレールハウスを賞賛し、保護したことにより、今日この施設が博物館として生き残る素地が形成された。

1940年、フレール主義者たちは、ナチやナチ教員連盟(フレール連盟も統合された)に働きかけて、幼稚園誕生100周年を祝った。ドイツ国内外で祭典が催されたが、最大の催しはバイロイト(バイエルン州)で1940年6月28日に開催されたものだった。ヒトラーは同祭典に祝電を送った。ベルリンでは、ペスタロッツ=フレールハウスで100周年が祝われ、エリカ・ホフマンがフレールをナチの自己犠牲の精神に繋がる愛国者として賞賛した。



図:バード・ブランケンブルクのフレールハウス(現、フレール博物館)で開催されたナチズム講習会のポスター(M・Berger(1986)、Vorschulerziehung im Nationalsozialismus, S.139より)

ドイツ本国で幼稚園誕生100周年が祝われていることに対して、日本からも祝意の伝達があった。雑誌Kindergartenの1940年9月号は、フレール幼稚園100周年の特集を組んだが、そのなかに「日本からの手紙」が紹介されている。送ったのは戦前期からキリスト教保育者として活躍した岩村(旧姓・小崎)安子である。岩村は、東京女高師保育実習科を大正2年に卒業し、東洋英和女学校附属永坂幼稚園や大森めぐみ教会附属幼稚園に勤めた。以下、雑誌Kindergartenの内容を紹介する。

日本からの手紙 (Brief aus Japan)

日本の幼稚園が、ドイツ幼稚園100年祭に贈りものとして、日本の子どもたちの絵を送ってきました。私たちは、この贈りものに添えられた手紙を翻訳して公開します。

ご挨拶と感謝!

遙かなる極東の国から、全人類に新たな至福の時代をもたらしてくれたフリードリヒ・フレールを記念する幼稚園100年祭に、このご挨拶をお

贈りします。

私たちは、お互いに民族のための戦争という非常時に、教育者として次世代へのなんと大きな責任を双肩に担っているでしょうか!この次世代は、人類にとって新たな時代の担い手となるに違いありません。

ここ日本では、幼児のために500を超える教育施設—幼稚園、保育園、幼児学校—があり、今日、平均してそれぞれ40人の園児がいて、20万人以上の子どもが、フレール教育学の至福に満ちた影響下にあります。そして、これまでどれくらいの人々が、フレールの思想に直接間接に影響を受けたかを数字で示すなんて事は不可能です。

この記念祭にあたり、私たちは神に感謝します。神は人類にこの教育者をお贈りくださったからです。そして私たちは、ドイツ民族を讃えます。このドイツ民族からフリードリヒ・フレールがこの世に贈られたからです。

「キリスト教教育連盟」—2,600以上の教育施設を包括しています—の委託で、感謝の意と栄誉を記します。

園長 岩村 安子

キリスト教徒の岩村がフレールとその母国ドイツを絶賛した当時のナチス・ドイツは、キリスト教系の教育施設を迫害していた。またナチはユダヤ人などの子どもを、民族浄化の対象としていた。ナチによって主催され、ナチによって祝われた幼稚園誕生100周年に書簡で祝意を示すことがどのような意味をもつのか、おそらく岩村は戦後になっても何らの痛痒を感じなかったであろう。また、ドイツにおける幼稚園とナチ研究の第一人者M・ベルガーによると、戦後、ナチズムに何らかの反省を示した幼稚園関係者は彼の知る限り皆無だったという。

(参考文献)

- Zeitschrift Kindergarten, 1940, Heft 9, September (お茶大附属幼稚園および広島大学所蔵)
- 小玉亮子(2022)「幼児教育におけるジェンダー・ポリティクス—ペスタロッツ・フレールハウスとナチズムの関係に注目して—」『教育学研究』89(4)
- 小林恵子(2003)『日本の幼児保育につくした宣教師(下)』キリスト新聞社
- M. Berger(2019): Der Kindergarten im Nationalsozialismus, Göttingen, Cuvillier Verlag

読書会へのお誘い

企画者・報告者 稲井 智義

この度、下記の読書会を企画いたしました。ご関心をお持ちの方はご参加くだされば幸いです。

“Passages to Modernity”を読みほぐす

日時・実施方法:2024年3月23日(土)10時30分から12時30分まで、Zoomによる。

資料配布:3月22日22時頃までに報告者のリサーチマップ<https://researchmap.jp/inai>の「資料公開」(パスワードは「uno2024」)に共有します。

トピック:読書会・幼児教育史参加Zoomミーティング

https://us06web.zoom.us/j/89985308572?pwd=MeF20tgSuN
UmbobzMavPOnvqUpvO7.1
ミーティング ID: 899 8530 8572 パスコード: 750269

【趣旨・内容】

本読書会の文献は、Kathleen Uno “Passages to Modernity: Motherhood, Childhood, and Social Reform in Early Twentieth Century Japan” (1999) である。今回は歴史人類学者の玉野井麻利子による書評を手がかりとしたい。現時点では、著者の経歴、謝辞、はじめに、第1章、徳永恕に関する記述(第5章)、文献一覧などについて報告する予定である(30分程度)。次に参加者からの素朴な質問や事実確認を受けたい。その後、本報告と本書をめぐって参加者の方々と議論したい。

検討文献・書評などをお持ちでなくてもご参加いただけます。以下は関連文献です。

①Book Review: Mariko Asano Tamanoi, *The Journal of Japanese Studies*, The Society for Japanese Studies, Vol. 27, No. 1, 2001(Winter), pp. 153-156.

②検討文献を紹介した拙稿「『「保育の質」を超えて』を読む」『社会保育実践研究』7、2023。
本企画は科研費20K13948の助成を受けた研究成果の一部です。

問い合わせ先・連絡先

inai.tomoyoshi@a.hokkyodai.ac.jp

〒070-8621 北海道旭川市北門町9丁目 北海道教育大学旭川校 稲井智義

新入会員・会員異動(2023.6.20~2024.2.23) (省略)

寄贈図書 (2021.7~2022.2)

- ・中島恒雄『新・二十一世紀の大学教育改革—創立者が語る東京福祉大学・大学院の挑戦—』ミネルヴァ書房、2023年3月。
- ・中島恒雄『最新できなかつた子(生徒)をできる子(学生)にするのが教育』ミネルヴァ書房2022年5月。
- ・土屋敦・野々村淑子『医学が子どもを見出すとき—孤児、貧困児、施設児と医学をめぐる子ども史』勁草書房2023年7月。
- ・高根文雄・高根文字『いのちのちから—マリア・モンテッソーリがほんとうに伝えたかったこと—』ゆいぽおと2023年9月。
- ・是澤博昭『赤本<1938~1941>—内務省児童読物統制・佐伯郁郎とその朋友』世織書房、2023年11月。

機関誌編集委員会からのお知らせ

『幼児教育史研究』第19号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2024年5月1日から5月31日までに事務局宛にメールでお送りください。詳細については、学会ホームページ掲載の投稿要領をご確認ください。多くの皆さまからのご投稿をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

1) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は、10月1日から翌年の9月30日までです。振込用紙は、第19回大会年度(2023年10月1日~2024年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方にお送りしております(2024年3月1日確認)。

宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。シールの記載と振り込み用紙がない会員は完納状態にあります。本状と行き違いでご納入の場合には、何卒ご容赦ください。

年会費: 一般会員 7,000円 特例会員(学生・退職者等) 4,000円

送金先: 郵便振替 00190-9-73668 加入者名: 幼児教育史学会

2) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、どうぞもれなくメールにて下記の学会事務局までお知らせください。

3) メールアドレス登録のお願い

イベントのお知らせなど、学会事務局からの連絡のために、送信専用のメーリングリストを作成する予定です。メールアドレスをご登録頂いていない方は、事務局までメールでアドレスをお知らせください。

幼児教育史学会会報 第37号 2024年2月28日

発行者 幼児教育史学会

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科 浅井幸子研究室気付
幼児教育史学会事務局 E-mail: admin@youjikyokushi.org
郵便振替 00190-9-73668

編集 榊 瑞希子 印刷 木元省美堂